

行って、普段いる都会から少し離れて静かな心持でいられることも仲間との生活が楽しくなる一つの要因ではないかと思えます。

もう一つの頂上からの眺め、これは山に登ったときに一番感動できることだと思います。山に登っている間の苦勞が喜びに変わる瞬間だと思えます。天気が悪いと周りの景色が見えず、残念な時もあります。天気がよければあれほど素晴らしいものはありません。苦勞すれば苦勞するほど、いつそうきれいに見えるような気がします。

仲間の支え

私は部長をやっていますが、学校の教育方針が自主自立ということもあり、山行の計画書や合宿の計画書などは生徒自身で作っていかなくてはなりません。そのとき支えになってくれるのが同じ部の仲間です。山行のときはもちろん仲間同士で支えあっています。そういうことがこういう中でも活かされているのではないかと感じます。何事も同じ仲間の支えがなければ、うまくいかないと思えます。山は仲間との出会いを提

供し、同時に仲間と深く交流できる場所であると思えます。

山岳部に入ってから時間はまだ短いですが、ここでできた仲間を大事にし、山でまた新しい仲間ができてくれることを信じています。

(部長・新井洵太郎)



- 1 2007年8月中学生のみで行った夏合宿の登山
- 2 中高一輪の合宿の後に高校生が登った北岳の山頂で記念写真
- 3 月例山行で行った高水三山の一つ、惣岳山
- 4 冬合宿の八ヶ岳、テントで泊まった黒百合ヒュッテ前で最終日の出発前に
- 5 春合宿の奥秩父で中学生と別れた後、高校生だけの朝日山頂
- 6 中一が山岳部に入って初めてテントでの宿営を経験する丹沢・鞋ヶ丸、頂上で記念写真
- 7 部編「岩燕」平成8年～平成17年、山岳部の活動報告書、主にOBが作成しています
- 8 夏合宿の甲斐駒ヶ岳、合宿に参加した部員全員で記念撮影
- 9 中学一年生をクラブ勧誘して最初に登る山が黒丸山です
- 10 今年(2008年)の春合宿で行った金峰山の山頂、このあと中学生と高校生が分かれ、高校生だけの山行が行われる

◆顧問の目から

ちょっとした背伸びを積み重ねるための手伝いができれば
増子寛

麻布学園山岳部(Azabu Alpine Club (AAC))は、創部より60有余年の歴史に支えられて活動しています。長い歴史の中では、隆盛を極めた時期、少人数でも多くの成果が上げられた時期、そして、ただ命脈を保つのに汲々とした時期もありました。現在はOB諸氏の努力もあって、幸いにも部員数も回復し、部としての全体の活力も上昇しつつあります。天幕の収容人数が足らなくなるといったうれしい悲鳴も上がるほどで、中学生から山に入ることに魅力を感じてくれる生徒が増えたことは頼もしい限りです。

顧問としては、生徒たちには快適な山行を1回でも多く体験してもらるように心がけています。山での経験を積み重ねるうちに、快適さの意味も次第に変わっていくものです。経験をより大きく生かすには、ちょっとした背伸びをする気持ちが必要です。その背伸びを実現させるためには、もちろん自分たちで努力しなければなりません。周囲のサポートも必要です。ちょっとした背伸びを積み重ねながら成長していく生徒たちのお手伝いができればと思っています。

中学や高校での学園生活は、それからの長い人生の基礎を作る場所でもあります。その時期に山に入ることの楽しみを味わってもらえば、今後は山を大切にしてくれるのではないかと期待しています。どんな山でもそれぞれに持ち味があります、それを最大限吸収できる「山男」になって欲しいと願っています。

